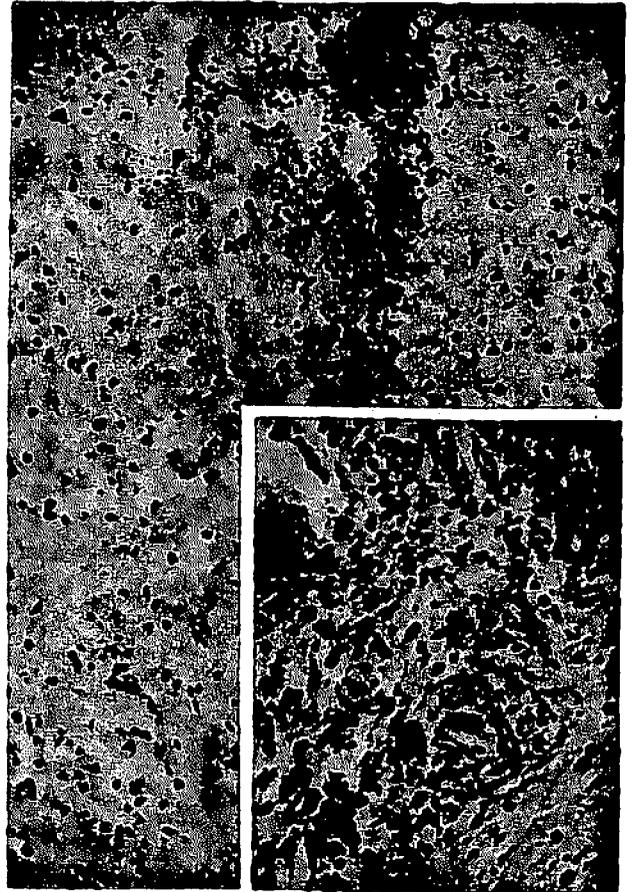
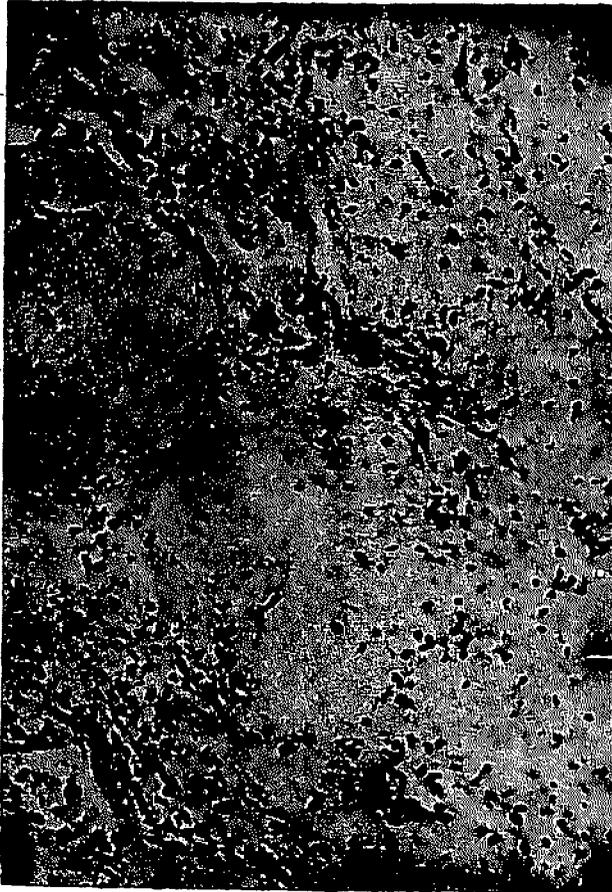


# 犬の髄膜腫

第10回獣医病理学研修会標本No.148

麻布獣医科大学家畜病理学教室出題



中型日本犬 ♂ 13才 (東京都内にて飼育)

臨床的事項：1969年4月よりテンカン様発作を起すようになり、プリミドンを投与した所興奮し、悲鳴をあげて物によつかるなど暴れまわり、ウインタミン筋注によりようやく鎮静したが、視力障害が2日程続いた。

その後、アトラキシン投与により鎮静鎮痛効果がみられたが、発作回数が徐々に増加し、ウインタミンを併用しても毎日軽い発作を起した。8月より右半身にチック様痙攣が現われ、全身痙攣も頻発した。

薬剤投与のため動作は緩慢であったが、昼夜の別なき生活状態となり、9月に入り安静時でも家人をも識別しえなくなり安楽死。

肉眼的所見：脳血管怒張、左頭頂骨内面に扁平、灰白色腫瘍存在、脳表面に圧痕、浮腫、出血。脳剖面には、圧痕部より実質内に侵入せんとする灰白色腫瘍組織を認める。左側脳室は狭小化、右側脳室軽度拡張。

病理組織学的所見：頭頂骨に付着する腫瘍塊は、濃縮気

味の核と好酸性の原形質を有する類円形の泡沫様細胞より成り、頭骨と密に結合する。脳圧痕部では、腫瘍の上方は頭頂骨に付着する部分と全く同様で出血を伴い、脳実質側では細胞は紡錘形に近くなり、層板状配列をなすが、渦巻状配列傾向は乏しい。硝子化傾向は強いが、脳実質に接する部分では殆んどみられない。その他、腫瘍の付着する大脳皮質内には、血管の傍に大小のリンパ球集簇がみられ、脳全体に赤色軟化単、神経細胞の変性像などが見出された。

病理組織学的診断：発生部位を考え、第10回獣医病理学研修会の討論をへて類上皮型髄膜腫と診断された。

〈写真説明〉

左：好酸性微細顆粒状の原形質を有する膨化した腫瘍細胞と高度の硝子化を示す。

右：大脳半球表面出血部で、出血と腫瘍細胞の核濃縮がみられる。

右下：大脳皮質に接する部分では、腫瘍細胞は紡錘形を示すことが多く、リンパ球の集簇をみとめる。